

自殺と近代社会 (二)

石 瀬 秀 治

二

我々は、前の節では、先ずデュルケムの含蓄ある自殺論の要旨を稍々詳細に検討し、次に又、それに対し幾らかの批判を加えることにより、自殺に対する我々の大まかな社会学的見解を暗示したのであるが、この節では更にそうした自殺と近代社会との關係を分析し、自殺を手がかりにして近代社会の構造や性格の若干を探索することしようと思う。

ところで、前の節で述べたように、デュルケムは自殺を「愛他的自殺」と「利己的自殺」と「無統制的自殺」に分類し、これ等の三種類の自殺を共に一様に一つの自殺の定義のうちに総括しているのであるが、然し、社会的慣習や社会的意志により義務づけられ、強制されて死ぬところの、前近代的な「愛他的自殺」と社会的強制によらない、個人の自由意志により自由を選択されるところの、近代的な「利己的自殺」や更には「無統制的自殺」とはそれ等の社会的倫理的な意味において全く質的に相違するのであるから、我々は、自殺は厳密には何所までも個人の自由意志により自由を選択された、而も社会的強制によらない自己殺人のみを意味すべきであるとし、更にはここでは仮りに「愛他的自殺」を前近代社会の自殺、あるいは前近代的自殺と称し、「利己的自殺」と「無統制的自殺」を近代社会の自殺、あるいは近代的自殺と呼ぶことにしたのである。だから、自殺と近代社会の關係を分析しようとする当面の課題にとつては、所謂「愛他的自殺」と前近代社会の問題はここでは無視してよいわけであるが、然し、これも前の節で述べたように、近代的な「利己的自殺」と前近代的な「愛他的自殺」とは対照的に研究されることが出来るし、又必要でもあり、そうすることによつてそれ等の諸特徴

が一層相互に明らかになるのであるから、ここでも近代的自殺と近代社会の關係を分析するに当り、先ずここで必要な限りに於いて前近代社会、特に未開社会の構造や性格と前近代的自殺、あるいは「愛他的自殺」の關係を簡単にみておくことにしたいと思う。

前近代社会は一般に先ず地域的には狭小な閉ざされた封鎖的社会である。特に未開社会は、と言つても、その未開性には種々の段階や相異がみられるのであるが、然し押しなべて未開民族における全体社会は普通部族 *tribe*、あるいは氏族 *clan* や局地集団 *local group* であり、その狭小性と封鎖性は極めて顯著である。未開社会の狭小性とはその生活圏が狭いこととその人口が稀少なることを意味する。又その封鎖性とは他の部族との間に交通や接触がなく、凡ゆる生活領域においてそれが自足的完結圏であることを意味するのであるが、この事は、その婚姻が普通部族内において行われるということに基づいて生ずる、その強固な血縁的連帶性や部族間の生活や行為の相対的な異質性と共に、未知の部族や人に対する恐怖や猜疑や敵意を生み出し、更には自種族中心主義 *ethnocentrism* や所謂内部道德 *Binneimoral* と外部道德 *Aussenmoral* との二元性 *Dualismus der Moral* 等を発生せしめる。そしてこれ等の事情が屢々の闘争や戦争を惹きおこす間接的条件となると共に、闘争や戦争が又逆にそれ等の事情を強化しているのである。未開社会におけるこうした諸々の事情が一方社会対社会の關係を対立的闘争的、更には相対的に異質的ならしめると共に、又地方、生産技術の低劣、それに基づく生活の共同性や等質性、保守的伝統性、文化や個人的競争の未発達等と相まつて、必然にその社会内部の團結連帶を強固にし、その一体性

を高め、社会による個人の統制、社会による個人人格の吸収、従つて個性の未発達や個性の同質化を強化したのである。

又未開社会は、その人口の稀少や生産技術の低劣等の事情に基づいて、一般に社会的分業が未発達であり、従つて階級の形成や貧富の差も顕著でなく、階層的には平等性を特徴とする。而も社会的分業の未成は更に社会的機能の未分化を生じ、社会的機能の未分化は諸々の機能集団の未発達を生み出す。未開社会においては諸々の社会的機能は部族や氏族の如き全体社会によつてその全部、あるいは大部分を独占総括される傾向にあり、文明社会におけるような基礎的全体社会と機能集団との分化や錯綜化は未発達である。未開社会におけるそうした機能集団の未発達や階層的平等性も又個人を社会の中に吸収没入せしめ、従つて個性の未発達を生ぜしめ、又逆にそうした個性の未成は益々機能集団の未発達や階層的平等性と社会内部の団結統合を促進強化するのである。

未開社会においては、上に述べたような諸々の事情により、一般に社会対社会の關係は対立的闘争的となり、相対的に異質化するに對し、社会内部の団結統合や一体性は極めて強固となり、個人は殆んど全く社会に吸収され、個人の生活や行為の様式は極めて高い同質性を示し、従つて個性は極めて未発達となる。まことにデュルケムの言うように、未開社会は極めて強く統合されていて、個人化や個性は極めて不十分未発達なのである。レヴィ・ブルジョールも、こうした点を強調して、未開社会においては個人と社会との關係は多く融即として、あるいは同体として表象され、情感されるのであり、個人意識は集団意識から離れず、又それと対立することなく、それに強く連帯しており、個人意識を支配するものは連帶的な融即の感情であり、個人の心的生活は根底から社会化されている、と言う。又ウェルナフも、未開人の精神生活は知情意が未分化であるばかりでなく、その行動も主客未分化の行動であり、自我は深く環境中に融け込んでいて、常に具体的な生活状況に束縛されており、更に我は汝や種族と渾然たる複合の一体をなしていて、自我領が頗る広く、従つてそこでは全体は部分を絶対的に規定し、逆に部分は全体そのものと同一視され、「部分を全体と見做す」*pars pro toto* ところの部分

即全体の原理が行われる、と言う。このように、未開社会においては、一方社会内部の統合は極めて強固となり、個人の個性は未発達、同質的となるのであるが、他方社会対社会の關係は対立的闘争的、更には相対的に異質的となり、従つて社会の個性は相対的に大となる。そして、こうした社会の個性と個人の個性との關係は言わば相反關係にあるのであつて、ジンメルの説いたように、社会の個性は個人の個性の拘束の上に生じ、社会の個性が大となれば個人の個性はそれより抑圧されるのであり、だから個人の個性の發展は社会の個性を打破することによつて起り、個人の自由の發展は社会的団結や統制の弛緩を意味するのである。

未開社会は、以上のように、その構造上必然的に高度の統合性を有し、従つて不十分な個人化や個性の未発達を生ぜしめるのであるが、少くともそうした事情は、程度の差はあるが、大体古代の奴隸制社会や中世の封建制社会にも同様にみられる。特にそうした身分社会においては、個人は単に地域的水平的に封鎖されるのみならず、身分的垂直的にも封鎖され、土地と身分に強く繫縛されるのであり、更に又その政治的法律的な支配組織の発達により、個人は身分や社会のうちに深く没入するように強制される。つまり、それにおいては個人の生活や行為は社会や諸々の身分の慣習や伝統や法律に従い、それ等に即自的に包摂せられるのであり、従つて社会と個人とは未だ充分に分化せず、即自的に融合している。即ち、個人は社会の積極的な構成単位としての存在を對自的に自覚し、主張するに至らず、その生活の目的や意義が社会や特定個人のうちにあり、従つて個人は一方では社会から独立せる存在であると同時に、又他方では社会の部分たる存在であるというような近代市民社会の弁証法的構造は未だあらわとなつていないのである。

未開社会や又、程度の差はあれ、前近代社会一般は、以上のように、その構造上必然に一応高度の統合性を有し、従つて不十分な個人化や個性の未発達を生ぜしめるのである。デュルケムは未開社会等にみられるこうした状態を愛他主義と呼ぶのであるが、そうした用語法は不適当であり、非社会学的であることは前節で指摘したところである。然し兎も角こうした未開社会や

前近代社会における自殺は、デュルケムの言うように、正しく高度の社会的統合化や不十分な個人化に基づいて生ずるのであり、所謂愛他的自殺の社会的誘因はそうした高度の統合化や不十分な個人化に外ならない。即ち、例えば未開社会における夫が死んだ時の妻の自殺、あるいは首長や王侯等が死んだ時の臣下の自殺等は未開社会における夫と妻との関係、あるいは首長や王侯と臣下との関係が強く統合され、深く融即して、別離を許さないことに基づくのである。レヴィ・ブルニールやウェルナフも指摘しているように、未開社会においては夫と妻との間には強い連帯性がみられ、密接な神秘的融即の関係が生ずるのであり、更に又そうした未開社会においては生や死の概念は全く神秘的であり、「人間は死んでも、現在生活している人間の社会に融即しながら、而も同時に死者の社会に加わりながら、ある状態において生きている」のであつて、あの世とこの世とが融即視されるのである¹⁰。こうした未開社会における特有な生死の観念と相まつて、その自殺は全く強固な社会的統合化、従つて不十分な個人化や未発達な個人の自覚を社会的誘因とする「愛他的自殺」とならざるを得ないのである。だから、それは、「利己的自殺」のように、個人のみの自由なる意志選択や意志決定によつてなされるのではなく、何所までも社会的意志や社会的慣習から社会的義務として強制されるという性格をも持つことになる。

勿論、レヴィ・ブルニールの指摘しているように、そうした場合に例えば凡ての寡婦等が皆自発的に死ぬわけではなく、或るものは諦めて、或るものは周囲のものから強制されて死ぬこともよくあるわけである¹¹。然し、何れにしても、そうした自殺は何所までも強固な社会的統合と不十分な個人化という社会構造を前提にして始めて成立するのである。又例えば坂東武者の主従関係においては、その緊密な生存の共同性に基づいて、主君は家人のために、おのれの利害を忘れ、生命をも賭し、又そのような主君に対して家人は一層の感激と情熱をもつておのれを捧げるという、残りなき献身と犠牲を要求する道徳、つまり利己主義の克服や無我の実現を中核とする道徳を作り出し、こうした道徳が、仏教と結びつくことによつて、生命よりも尊い価値、ある

いは高次の生を認め、死においてその高次の生に達しようとする態度を生み出した、と言われる¹²。武士社会における数多くの殉死や追腹等も失張り緊密な生存の共同性や社会的統合性と更には個我の否定や不十分な個性の自覚を社会的前提として始めて起り得たのである。

又未開社会や前近代社会は、前に述べたように、一般に高い程度の狭小性、封鎖性、血縁的連帯性、生活の共同性等をもつのであるから、その社会関係は自ら直接的・間接的、従つて全面的・具体的な熟知関係となり、個人は相互に観念や感情の不断の密接な交流を持ち合い、相互に全面的・具体的な熟知の配慮に基づく愛着と犠牲の共同社会的社会関係を作り合うことになる。その結果、個人は、近代社会の利益社会的社会関係にみられるような、精神的・心理的孤独の状態に陥ることがない。即ち、個人が悲哀や絶望に満たされている時には、人々はその悲哀や絶望を共にし、更には彼を慰め、強めるということになる。そうした共同社会的社会関係や更には慣習や伝統の強く支配するところにおいては、人は周囲の人々の熟知的愛着的な配慮や統制に反き、社会に負うている義務や責任を勝手に放棄するような利己主義、従つて又「利己的自殺」や「無統制的自殺」は一般に不可能であり、自殺は必然に、個人が愛着し、個人にその生活の目的と意義を感じしめるところの、社会や特定個人から要請されて行われる「愛他的自殺」の形態をとらざるを得ないのである。

我々は、今まで、前近代社会の構造とその自殺類型の関係をここで必要ならしめる限りにおいて見てきたのであるが、前近代社会における自殺は、デュルケムの言うように、正しくその強大な社会的統合化と不十分な個人化を社会的誘因とするものであり、所謂愛他的自殺にならざるを得ないのである。従つてこうした愛他的自殺は、近代社会の発達により、社会的統合が弱まり、個人の個性が発達し、利益社会的社会関係が増大するに従つて減少し、消滅している¹³のであり、そしてそれに代つて近代社会に特有の自殺類型が作り出されることになつていたのである。次にその問題を考察することにしよう。

富山大学紀要経済学部論集

- (1) 臼井二尚、「未開社会考」(哲学研究、第四百号、二〇—二四頁)、姫岡勲著「未開社会の構造」三二—五六、七九—九七頁
- (2) M. Weber, Wirtschaftsgeschichte, 1923, S. 303f.
- (3) シミットとノットスも未開社会の保守的停滞性をその封鎖性と狭小性に帰して、Schmidt und Koppers, Völker und Kulturen, erster Teil, Gesellschaft und Wirtschaft der Völker, 1924, S. 17
- (4) 例えは血の復讐 blood-revenge の義務や全体責任という現象は未開社会におけるそうした一体性を明瞭に示している。
- (5) 古野清人訳、デュルケム「宗教生活の原初形態」岩波文庫、上巻、二四頁、その他随所に。尙未開社会においては個人化が極めて未発達であると言つても、それは勿論未開社会に個人的獨創性がみられないなどということの意味するものでなくことはデュルケムの自ら認めてゐる通りである。Durkheim, Les Règles de la Méthode Sociologique, p. 86
- (6) 山田吉彦訳、レヴィ・ブルニール「未開社会の思惟」八九、三九六、一〇六頁等
- (7) 矢田部達郎訳、ウェルナ「精神の発達」七三、一四三、二四八、二九六—七、二九九頁等
- (8) Simmel, Soziologie, I Aufl., S. 715
- (9) 山田吉彦訳、レヴィ・ブルニール「未開社会の思惟」三五八—三六二頁、矢田部達郎訳、ウェルナ「精神の発達」三〇六—七、四一四頁
- (10) 山田吉彦訳、レヴィ・ブルニール「未開社会の思惟」三二八—三三三頁、矢田部達郎訳、ウェルナ「精神の発達」三〇二、四〇七頁
- (11) 山田吉彦訳、レヴィ・ブルニール「未開社会の思惟」三三一頁
- (12) 和辻哲郎著、日本倫理思想史、上巻、二九〇—三一八頁
- (13) 印度における Sati や日本における殉死等もそれ等の封鎖的共同社会的な社会構造の崩壊と共に漸次減少していつた。例えば日本においては慶長十二年十月本多忠勝が死んだ時、家臣大谷三平が追腹し、更に又その草履取りの僕がこれに殉死したのであるが、その時に草履取りが歌つたといわれる辞世に「死にともなふあ死にともなふ」とて君が情けの今は恨めし」というのがある。これは封建の主従関係における残りなき献身の道德の立場と次第に目覚める個性の自覚の立場

との相剋をよく現わしているが、殉死や追腹等は、そうした個人個性の自覚の発展につれて、江戸時代の初期には殆んど跡を断つに至つたと言われる。

近代社会においては、デュルケムの言うように、個人我が社会我に対して、或は社会我を犠牲にして過度に確立されているような、利己主義や過度の個人主義が支配し、社会の統合力や統制力が弱体化しているのであるが、そうした過度の個人化と社会の無秩序や無統制に基づいてそこに所謂利己的自殺や無統制的自殺という特有の自殺類型が作り出されているのである。元来近代社会は、周知のように、大体十六世紀に始まり、文芸復興、宗教改革、市民革命、産業革命等を経て、政治的には民主主義を、経済的には自由主義的資本主義を標榜し、又人間主義、個人主義、自由主義、合理主義、啓蒙主義等によつて育成され、十九世紀にいたつて完成したものである。つまり、近代社会は個人の自由や自覚という根本理念によつて培われ、又それを育んできたのである。然し一体先ず近代社会は如何なる社会的政治的経済的条件によつてそうした個人の自由や自覚を發展せしめ得たのであろうか。デュルケムの自殺論にはこの点に関する充分な説明が缺けていたので、我々は先ずここでその点を、近代社会の構造の若干を明らかにするに必要な範囲において、順次検討していくことにしよう。

我々我々は、中世の封鎖的封建社会から近代の開放的市民社会を發展せしめた根本原因は生産力の増大と人口の増加等である、と思う。そして生産力の増大と人口の増加は先ず一方社会密度を増進せしめ、交通、商業、交易を發展せしめ、社会を拡大せしめることにより、中世の自給自足的封鎖的な社会構造を打破し、地域的水平的には閉じられた封鎖的社会から開かれた開放的社会への發展を作り出すと共に、他方社会分化や貨幣経済の発達や階級形成を促進することにより、階層的垂直的には中世の封鎖的身分社会から近代の開放的階級社会への發展を可能にしたのである。即ち、近代社会は先ず個人を出生によつて運命的に特定の地域や身分や職業に繫縛することなく、少くとも形式上は地域的水平的にも、又階層的垂直的にも社会的移動や社会的

周流を許す開放的社会として成立することになつたのである。

ところで、近代社会においては、生産力の増大や人口の増加により、社会が拡大し、社会的分業が進展し、人間の欲求が増進するに従つて、諸々の機能集団の分立や基礎的全体社会とそうした諸々の機能集団との分化や更にはそれ等の錯綜化が生ずるのであるが、これ等の事実が個人人格や社会生活の分化や異質化を生み出し、その結果人間性の発見や個性の覚醒や人格の独立を促進し、又逆にそうした人間性の発見や個性の覚醒や人格の独立が更に諸々の機能集団の分化や錯綜化を促進するに至つてゐることは周知の通りである。前に述べたように、前近代社会においては、基礎的全体社会が諸々の社会的機能を独占総括する傾向を持ち、従つて基礎的全体社会と諸々の機能集団は未分化の状態にあり、その結果個人はひたすら基礎的全体社会に没入せしめられ、個性の未発達を生ぜしめた。然るに近代社会におけるそうした基礎的全体社会からの諸々の機能集団の分化独立やそれ等の錯綜化が個性の発達や人格の独立を促進していることは顯著な事実である。

また、近代社会は、その大なる地域的水平的及び階層的垂直的な社会的移動や社会的周流により、諸他の社会との接触交渉やそうした他の社会との間における広汎なる横断的結合、即ち社会結合の遠心化を増進せしめ、従つて諸他の文化様式や行為様式や人格類型に接触する機会を多からしめるのであるが、こうした事實は人間の生活態度を伝統的様式への盲従から解放し、必然に自他の文化様式や行為様式や人格類型を比較考量し、分析批判せしめることにより、自覚的、反省的、批判的、合理的たらしめ、その結果人間性の発見や個性の覚醒や人格の独立を促進せしめてゐるのである。バジヨットが、商業は他の社会との接触を不可避ならしめることにより心の拡大 *enlargement of mind* をもたらす、⁴⁾ というのはこうした事情による。又十一世紀の末に始まつた十字軍によつて、西ヨーロッパの諸民族がビザンツの文化圏に触れたことからして、初めて西ヨーロッパに歴史らしいものが作り出され、更に十六世紀以来のヨーロッパ人の視圈拡大に伴つて次第に歴史的意識が発達し、新しい歴史哲学が作り出される端緒が開かれた、⁴⁾ と言われ得るの

石瀬・自殺と近代社会(二)

も同様の事情に基づくことなのである。更には又近代化に際してフランス・ペーコンがイドラ *idola* からの解放を強調し、マックス・ウェーバーが近代化を呪術の克服 *Entzauberung* や知性的合理化 *intellektualistische Rationalisierung* の過程として説くのもそうした事情と決して無縁ではない。そうした人間性の発見や個性の自覚や人格の独立等は、例えば、「自分の思うことをせよ」(ラブレ)とか「私に何が分つていよう」、「自己が自分のものであることを知るのが人の最大事」であり、「考はたとい言うに足りぬものなりとも之を変えない」(モンテーニュ)とか、「きわめて明晰に、きわめて判然と現われるもののほかは、何ものをも私の判断のうちに取り入れぬ」(デカルト)というような言葉のうちに明瞭に示されている、と言えよう。

更に又近代市民社会は、封建社会の否定として、政治的には市民革命により一応個人の自由と平等を根本理念とし、民主主義を標榜して発展したのであるが、そうした民主主義の基礎をなしている個人主義や自由主義等の社会思想は前に述べたような、又この後に述べるような社会的経済的条件によつて作り出されたものであり、又逆にそうした社会的経済的条件によつて来たのである。近代市民社会が如何にそうした個人主義や自由主義等の社会思想を発達せしめ、又それ等によつて発展せしめられて来たかはここではこれ以上縷説を要しないであらう。

最後に近代市民社会は経済的には資本主義を原理とし、市民社会の発達には取りも直さず資本主義社会の発達なのであり、例の市民革命の担い手も実は経済的新興市民層であつたのであるが、この資本主義が、前に述べたような社会的政治的諸条件と相まつて、近代市民社会における個人主義や自由主義や合理主義等を促進強化していることは言うまでもない。つまり、封建社会が土地や農民を基礎とするに對し、近代市民社会は商業や貨幣経済や資本を基礎とし、「あらゆる人間が商人である」(アダム・スミス)ような社会なのであり、「合法的利潤を職業(使命)として組織的に追求する心情」(マックス・ウェーバー)という資本主義精神を原理とし、無限なる資本の増殖のための放任された自由競争を基盤としてゐる。

近代市民社会はこうした資本主義の諸条件によつて正しくテンニースの所謂利益社会、あるいは打算社会として発展することになつたのである。まことに資本主義的利益社会における貨幣の役割りは極めて甚大である。ここではジンメルの、貨幣による社会の拡大と個性の発達との相関原則に注意しておくことにしよう。ジンメルによれば、私有制は人口増加の直接の結果であると同時に、この私有制の最も適当な地盤をなすものが貨幣であるが、こうした貨幣が一方において、私有制の媒介によつて、交易者の關係を拡大させる作用を営む。つまり、自然経済における運搬の困難は経済社会の範圍を必然に狭小にするのであるが、貨幣はその絶対的動性によつて社会の拡大を引起すのである。又他方において中世的結合形式が人格の一小部分だけをもつて他の人格や社会と結びつくことを認めなかつたに對し、貨幣は、個人人格の独立を害わずに社会的結合に入り込む可能性を与えることにより、人格の原子化を引起し、又農奴のように土地の附屬物化している者を地主から解放して、貨幣による貢税を可能にすることにより、人格の独立及び自由を伸展せしめる。即ち、社会圈が小さい時には、個性の自由も小であるが、社会圈が拡大する時には、個性の発達する余地が大となる。このように貨幣はその絶対的動性によつて社会の拡大と個人人格の独立化とを結びつけ、兩者を相関的に進展させるのである。

資本主義社会における自由競争の原理も又個性の覚醒や人格の独立を強化していることは注意さるべきであろう。この点についてもジンメルは言う。「個人を取囲む社会の範圍が拡大するに従つて個人人格の個性が成熟する」のであり、社会の「量的拡大が分化をもたらず」のであるが、それは結局「競争がそれに参与する人々の數量に応じて個人の特殊性を発達させる」からである。⁹⁾と。資本主義社会における競争はひとり個人々の間にのみ行われるのではなく、更に諸々の社会集団の間にも行われる。前にも述べたように、近代社会は基礎的全体社会と諸々の機能的部分社会との分化や錯綜化を作り出し、而もそれ等の社会集団は相互に個人の服従や忠誠を要求するため競争の關係に立つてゐる。新しい団結の成立がそれ丈で既存の団結に對す

る競争を意味することはジンメルの鋭く指摘してゐるところであり、又ラスキの言うように「我々の服従はその所屬する種々の集団の間に分配されてゐる」¹⁰⁾のであり、多くの結社形態は明らかに個人の服従を得んがために競争しつつある」¹¹⁾と言えよう。資本主義的市民社会におけるこうした個人間や社会集団間の競争も必然に個人個性の発達や個人人格の独立化を促進強化してゐるのである。

近代市民社会は、以上見てきたように、その社会的政治的経済的諸条件によつて、人間性の自覚、個性の覚醒、人格の独立等を促進強化してきたのであるが、近代市民社会におけるこうした個人化の傾向はこれ又必然に社会と個人との分化や対立を生み出し、個人に新めて社会を對目的に意識自覚せしめ、個人を社会の積極的な自覚的契機として主張せしめるに至り、そこに個人は一方では社会を積極的に否定し得る独立の存在であると同時に、他方では社会も個人の存在から明瞭に區別され、個人との明瞭な対立において存在し、而も個人はそうした社会の部分たる存在であるというような近代市民社会的生活の弁証法的構造が初めてあらわとなつたのである。つまり近代市民社会において初めて個人の自覚と相まつて社会の発見が行われ得たのである。兩者は弁証法的相即關係において同時に實現されたのである。ところで、近代市民社会は個人化の傾向を発達せしめることにより一方社会内における個人の異質化を進めると共に、他方そうした個人の異質化や社会相互間の移動周流により社会の同質化を高めてゐるのである。社会内の個人相互の同質性が社会間の異質性を増加し、狭小な封鎖的社会を成立せしめ、社会内の個人相互の異質化が社会間の同質化を生ぜしめることは多くの人々の説くところである。¹²⁾そして、社会内におけるそうした個人の異質化や個人個性の発達、社会間における移動周流の高度化による社会意識の相對化、人口密度の増加による個人相互間の監視の弛緩化、基礎的全体社会と諸々の機能的部分社会との分化対立やそれ等の錯綜化による社会統制の分散対立や抽象化、放任的自由競争による無秩序等と相まつて、社会意識の統制力を鈍くし、社会統制の拘束力を小にし、社会的団結や社会的統合を弱めるに至つてゐる

のである。前にも述べたことであるが、ジンメルの説いたように、社会の個性は個人の個性の拘束の上に生じ、社会の個性が大となれば個人の個性はそれを抑圧されるのであり、従つて個人の個性の発展は社会の個性を打破することによつて起り、個人の自由の発展は社会的団結や統制の弛緩を意味するのである。このように、近代市民社会における個人化の傾向は必然に社会統制の抽象化や弱化を招き、社会的統合の弛緩化を生ぜしめ、そうした事態は特に後で触れるような資本主義に基づく階級の対立闘争や国内的無統制や国際的無秩序等によつて今日益々極めて顕著なものとなつてゐるのである。

我々は今まで近代社会における個人化の傾向が先ず生産力の増大と人口の増加に基づく社会密度の増進、交通や商業や交易の発展、社会の拡大、社会の分化、貨幣経済の発達、階級の形成等に始まり、更に基礎的全体社会と諸々の機能的部分集団との分化や錯綜化、社会結合の遠心化、政治上の自由平等の理念の発達、資本主義や貨幣や競争による利益社会化、社会統制の弱化や抽象化等によつて促進強化されてきた次第を極く大まかに辿つてきたのである。このようにして、近代社会は、デュルケムの言うような、個人主義や利己主義と無統制や更には無秩序の支配する社会として成立し始めたのであり、そしてそうした個人主義や利己主義と社会の無秩序や無統制に基づいてそこに所謂利己的自殺や無統制的自殺という近代社会に特有の自殺類型を生み出す社会的基礎構造を作り出したのである。我々は今までそうした利己的自殺や無統制的自殺を生み出す近代社会の基礎的な構造聯関を大まかに分析してきたわけである。然し近代社会におけるそうした利己的自殺や無統制的自殺を具体的に理解するためには、そうした近代社会の基礎的構造聯関に附随して更にそれに特有の何つかの社会關係の性格を明らかにしなければならぬ。次にその点を簡単に見ていこう。

(1) 例へば高田保馬著「階級及第三史観」、その他、及び小松堅太郎著「社会変動論」、一三二—一三九頁参照

(2) 社会の人口や密度の増加が分業の発展を促し、社会の拡大を發展せしめることを強調するものにデュルケムがある。即ち、「社会内部の諸關係はもし社会成員

石瀬・自殺と近代社会(二)

の全体数が増加すれば一層また増加するであらう。社会がより多くの個人を含むと同時により密接に接觸するならば、その効果は必然に増大する。社会の量は密度と同じ影響を分業の上に及ぼすのである」と。Durkheim, *Division du Travail*, P. 242

- (3) Bagehot, *Physics and Politics*, P. 40
- (4) 和辻哲郎著「近代歴史哲学の先駆者」、三—三八頁
- (5) Simmel, *Soziologie*, 10 Kapitel; *Über die soziale Differenzierung*, 3 Kapitel; *Philosophie des Geldes*, S. 382
- (6) Simmel, *Soziologie*, I Aufl., S. 710
- (7) *Ibid.*, S. 421
- (8) Laski, *Studies in the Problem of Sovereignty*, pp. 14—15
- (9) Laski, *Authority in the Modern State*, P. 81
- (10) Simmel, *Soziologie*, VI u. X Kapitel; *Differenzierung*, SS. 45—55; Giddings, *Principles of Sociology*, P. 170; Boudé, *Les Idées Egalitaires*, passim

開放的近代社会においては先ず、その大なる地域的及び階層的な移動周流のために、人は相互に相手を個別的具体的に理解したり、熟知することが困難となり、従つて人々の日々の面接触的な直接的接觸に基づく熟知的な社会關係に乏しく、その社会關係は匿名的な、更には間接的接觸に基づく社会關係が支配的とならざるを得ない。そして、そうした匿名的社会關係、あるいは社会關係の匿名性は、諸他の適合的条件と相まつて、人間の道德意識の低下と社会統制の弱化を生じ、その結果個人主義や利己主義を強化し、利己的自殺や無統制的自殺の發生を刺激する機会を与えている、と言えよう。

又近代社会においては、同様にその大なる開放性のために、個人は相互に不断に新しい未知の、職業や階級や行為様式等を異にする、数多くの人々と接觸交渉せねばならず、而も相互に相手の具体的な個性や人格を熟知してゐないために、相手を極めて一般的普遍的なる類型、あるいは範疇において理解せざるを得ないのであり、従つてその社会關係は自ら極めて抽象的、形

式的、機械的、外面的、皮相的、部分的とならざるを得ない。ジンメルのように、そうした社会的交渉は自ら人格や個性を一般化し generalisieren 類型化し typisieren 普遍化 Verallgemeinerungen して、個性を普遍的なるものに転調 Umstimmungen des Individuellen ins Allgemeine してみようになる。特に資本主義的打算社会における交易関係は、テンニスの説くように、打算的個人を前提し、その交易の対象は商品であり、商品は潜在的貨幣、貨幣は事物として解せられた打算意志一般であり、従つて打算社会においては打算意志や貨幣による雇傭関係が支配するのであるが、その結果人間の品位も単なる商品価値や交換価値にさえも解消されるようになる。勿論人間の思惟や行動における抽象化や普遍化や合理化等は確かに近代社会の発達を生み出した一つの主要な契機なのであるが、然しここに見られるような社会関係の抽象性や合理性は、その特に資本主義という経済原理のために、何所までも単なる形式的合理性に止まるのであつて、決して完全な実質的合理性を実現しているものとは言えない。

兎に角このように人々が常に全人的に了解されず、具体的なる個性や人格を差引かれ、抽象的、形式的、機械的、外面的、皮相的、部分的にのみ交渉し、相互に冷淡、誤解、無理解、無関心に明け暮れ、従つて一般に過小待遇されている社会においては、人々は、程度の差はあつても、潜在的に一種の孤独感や寂寥感のうちに佇むにいたり、或はそうした過小待遇に不満や反抗を示し、又或は人間嫌いや世間嫌いに走ることに易い。ヤスパースが、現代人の精神生活について、「個人は自身自身を絶対に他人に結びつけることをしない。遺棄された生存の脅威が本質的孤独の意識を生み、こうした意識が人間を軽薄な利那性から野卑な粗硬性へ、更には不安へと追いやるのである」と言うわけであろう。こうした近代市民社会における抽象的形式的な社会関係による慰められない孤独感も確かに利己的自殺や無統制的自殺を培養している一つの社会的誘因たるを失わないであらう。

更に又我々は、ウェーバーと共に、近代生活を規定する最も宿命的な力が資本主義であることを強調しなければならぬ、と思う。そして、この資本

主義は、政治的社会的な官僚制機構の発展と共に、一種の人間疎外や人間喪失を作り出しているのである。この点をウェーバーの言葉に従つて少し注意しておこう。ウェーバーによれば、キリスト教の禁欲主義の精神が僧房から職業生活に移され、現世の世俗的倫理を支配し始めることにより、それは近代的経済秩序の力強い機構を作り上げるに役立つたのであるが、今日においてはこの機構は鉄のように堅い外枠となり、この機構に入り込む一切の人間の生活様式を限らない力をもつて規定しており、将来も恐らく最後の固形燃料の燃え盡きるまで規定し続けるであろう。そこに作り上げられている市民的生活様式とは、つまり、完全に美しい人間性をもつ時代からの訣別と断念、精神のなう専門家と心情を失える享樂人 Fachmenschen ohne Geist, Genussmenschen ohne Herz 病的自己陶醉をもつて粉飾された化石的機械化を特徴とするものに外ならない。今日の社会では、凡て価値ある行為は専門労働に専念することと従つてファウスト的な多面的な人間性の断念なくしては不可能なのであり、つまり仕事と諦念 Tat und Entsagung とは今日では全く不可分のものである。そうした市民的生活様式の禁欲的基調は、既にゲーテも、その人生観の高みから、その「遍歴時代」や「ファウスト」の生涯に与えた終幕によつて、我々に説こうとしたものである。彼にとつてこの認識のもつ意味は、再び繰返して言えば、完全に美しい人間性をもつ時代からの訣別と断念に外ならないのである。全き人間性の断念、精神のない専門家、心情を失える享樂人、人間の化石的機械化、つまり人間疎外や人間喪失、これが資本主義経済機構に基づく一般的社会状況なのである。

尚又資本主義的市民社会は、その放任された無統制な自由競争のために、テンニスの説くように、打算的利益社会となり、各人は不断の緊張や潜在的闘争、警戒や不信の状態にあり、虚言や無恥にとらわれ、従つてあらゆる結合にも拘らず本質的には分離状態にある、と言えよう。そして、又テンニスによれば、共同社会においては統一的全体性が部分たる数多性の先に存在し、数多性は既存の統一的全体性から派生的に生ずるに對し、打算的利益社会においては部分たる数多性が統一的全体性に先行し、統一的全体性がこ

の既存の数多性によつて始めて構成されるのであり、従つて打算的利益社会は個人主義によつて發生し、又發展せしめられるのである。⁽⁸⁾その意味において、共同社会が現実的にして有機的な生活であり、自然的な集団であるに對し、打算的利益社会は觀念的にして機械的な構成物であり、人工的な統一体なのである。⁽⁹⁾兎に角、こうした資本主義的打算社会における警戒、不信、闘争の分離の社会關係や人間疎外等は、更に資本主義社会に固有の危機や缺陷や矛盾、例えば貧困、失業、生活不安、破産、恐慌、独占、階級闘争、帝國主義的戦争、拜金主義、金權政治等々と相まつて、近代市民社会における自殺の極めて大きな社会的培養基となつてゐることはどれ程強調されてもよいであらう。

近代市民社会における資本主義經濟機構に伴う諸条件と共に、又その政治的社会的な官僚制機構もその無視することの出来ない特質となつてゐるのであるが、これが又一種の没情誼化や即事物化を作り出してゐるのである。マックス・ウェーバーに従えば、現代文化の特質をなす官僚制 Bürokratie にとつては没主観的な事務処置や結果が予め計算され得ること Berechenbarkeit des Erfolges や計算し得る規則 die berechenbaren Regeln とうことが重要なのであるが、それが完全に展開した姿におつては憤怒も偏頗もなくという原則 Prinzip des sine ira ac studio に従うのであり、特に資本主義に歓迎される特性を展開するためには、それが人間味を失う entmenslichen ほどよく、愛憎などの、凡そ一切の人格的、情誼的 persönlich な、凡そ一切の不合理な(計算の対象とならないような)感情的要素を公務から排除するといふことが美点とされる。それが要求するものは人格的な同情、好意、恩寵、恩義によつて動くことではなく、人間的に公平無私な、従つて厳密に即事物的、没情誼的 sachlich な専門家なのである。⁽¹⁰⁾こうした専門的知識に立脚し、専門的部署において一個の機械装置の如く規則に従つて即事物的没情誼的、つまり形式合理的に勤務するといふこと、これが官僚制機構の基礎なのであり、そうした官僚制機構が今日においては官庁、軍隊、企業、工場等の大衆管理の機構として不可欠となつてゐるのである。そしてこうし

石瀬・自殺と近代社会(二)

た官僚制機構が、人間を諸々の社会集団内における一個の機械的部分装置として扱うことにより、人間性を抑圧し、疎外する傾向をもつようになることは避けられないところであらう。特にこうした近代的官僚制は、ウェーバーの指摘するように、歴史的には資本主義的貨幣經濟をその存続のための前提としてゐるのであるが、⁽¹¹⁾近代的官僚制はそうした資本主義機構に伴う上述の全き人間性の断念、精神のない専門家、人間の化石的機械化や更には打算社会的な社会關係や社会構造に支えられ、それ等と結びつくことによつて一層その没情誼化や人間性疎外の傾向をあらわにしてゐる。そしてこれが又近代市民社会における社会的自殺率の増加を促進してゐる一つの社会的誘因となつてゐるのである。

更に又資本主義は、周知のように、急激に都市の増加や人口の都市集中を生み出し、特に大都市や巨大都市の發展を可能ならしめたのであり、しかもこうした都市が近代社会やその文化を指導してゐるのである。まことに近代文化は本質的に都市文化であり、都市生れなのであり、市民 civilis-civil が文明 civilization の母胎なのである。而も、デュルケムも指摘してゐるやうに、一般にこうした都市社会の自殺率が農村社会の自殺率よりも高いのであるから、ここでそうした都市社会の構造について一言しておこう。我々は前に、近代社会は地獄の水平的にも又少くとも形式上は階層的垂直的にも大なる社会的移動性をもつ開放的社会であると語つたのであるが、都市社会こそは、アメリカの都市社会学者達の言うやうに、正しくそうした特徴を特に典型的に示してゐる移動的社会なのである。だから、今まで述べてきたやうな、開放的な近代市民社会に特有の諸々の社会構造や社会關係等も都市社会に特に顯著にみられ、従つて個人化の傾向もそうした都市社会において必然に高いわけである。その意味において、都市社会は利己的自殺や無統制的自殺を容易ならしめる社会的誘因を一層数多く又強くもつてゐるのである。デニースが打算的利益社会の典型として、市民社会や商業社会や株式会社等と共に、大都市を挙げる所以であらう。まことに「都市の交渉は無限に広くなりつつあるが、各人は殆んど最も孤立してゐる」のであり、それは「都市の大

富山大学紀要経済学部論集

きさが増す程、ますます非人格的になる」のであつて、「人間関係の非人格性は都市生活の自然の結果なのである。」⁽¹⁶⁾「都市生活の非人格性やそうした都市生活に適応する困難」が都市社会の自殺率を高からしめているのであり⁽¹⁷⁾、「人口密度の増加と自殺の増加との間には常に直接的関係がある」のであつて、「自殺率は工業化及び都市化の発展と共に並行的に増加する」のである。⁽¹⁸⁾尙一般に自殺率は年齢と共に増加し、特に二十才前後から急激に増加するのであるが、都市社会は本来その人口構成においてそうした自殺率の高い青壮年層を数的により多く含んでいるため、都市社会においては自殺の絶対数も又自殺率も一層高くなるわけである。尙又、デュルケムやモルセリの指摘しているように、自殺は一般に知識階級や自由職業に特に多いのであるが、都市社会は商工業や文化の中心地としてそうした階級や職業をより多く含んでいることは言う迄もない。だから、そうした知識階級や自由職業がより多く欲求の増大や神経の過労等を生ぜしめ、より多く自由主義的、個人主義的たらしめ、更には孤獨的、懷疑的、絶望的たらしめる傾向をもつことによつて、都市社会の自殺率を高めていると言えるであらう。こうした都市社会に固有の社会構造や社会関係、年齢構成、階級構成、職業構成は、更にその不⁽¹⁹⁾断の注意警戒の必要や物的環境の刺激の過多等による不適応や神経過労や精神異状等と共に、その社会的自殺率を高める社会的誘因となつてい⁽²⁰⁾るのである。

このように、近代市民社会における資本主義経済機構、それに結びついて⁽²¹⁾いる都市的⁽²²⁾社会環境、官僚制機構等の諸特質がその社会的自殺率を不可避的に高からしめているのであるが、尙近代社会における自殺の増加を考えるに当つて、最後に当然家族社会や宗教社会の縮小や崩壊についても注意しておかねばならない。先ず、デュルケムも強調しているように、一般に家族が強く統合されていて、その密度の大きい場合には、自殺は少いのである。然るに、多くの人々の説くように、古代及び中世の家族から近代家族への発展は大家族から小家族への縮小の過程であり、集団的結合の優越する家族から人格的結合の優越する家族への発展であり、更には国家権力の拡大と資本主義

的大企業の発生のため古くからの多くの機能を失うことによつて家族統制の必要の減退や男女間の優劣の縮小という特徴をもっている。⁽²³⁾まことに家族の近代化の過程は家族の全体性の消滅と個人のそうした集団的拘束からの解放の過程であり、家族の統合力や統制力や實在性の縮小崩壊の過程である。今日では都市の家族は単に夫婦、あるいは親子が短い期間のみ滞在するに過ぎない「集合所」を意味し、更には狭くて殺風景なものの、身を入れる住み所というだけのもの、旅での木賃宿 *Herberge* ⁽²⁴⁾ *und Reisen* と選ぶところがないと言われるのも決して誇張ではない。近代家族のそうした縮小崩壊の過程が、家庭の不和、高い離婚率、性生活の混乱墮落等々と共に、既婚者や離婚者や独身者の自殺率を増大せしめる社会的誘因となつてい⁽²⁵⁾ことは極めて明瞭であらう。

また、デュルケムも強調しているように、曾つては宗教も同様に社会の統合度を強化することにより自殺を予防したのであるが、然し今日それは最早日々の業務と無関係な哲学、あるいは単なる象徴的理想主義にすぎないものに墮落し、人間の生活を以前のように強く規制する權威を失つて了つてい⁽²⁶⁾る。マクマレイは「宗教はまさにそれ丈で人間精神を個人的にも社会的にも結合し得る文化のアスペクトである。近代の世界において人間の統一を不可能ならしめているものはこのような宗教の缺如である」とい⁽²⁷⁾うのであるが、近代世界における人間の統一という問題についてそう簡単に答え切⁽²⁸⁾ることは不当であるとしても、然し兎に角そうした宗教の缺如や無信仰や懷疑等が近代社会の自殺率を増加せしめていることは明瞭であらう。

我々は今までデュルケムの所謂利己的自殺や無統制的自殺の社会的誘因である過度の個人化や無統制が如何なる社会構造や社会関係等によつて作り出されたものであるか、近代社会における如何なる社会構造や社会関係がその自殺率の増加を促進しているのかを検討し、併せて近代社会に支配的な構造や性格の若干を分析してきたのである。我々はここで改めて率直に近代社会における自殺やその増加は、デュルケムの言うように、まさしく過度の個人化と無統制を社会的誘因とするものに外ならないことを強調しておか

ねばなるまい。キアヴァンも同様に現代社会における自殺の原因をその結合力の強度の減退にありとし、更に「その起源は社会的にして、それは道徳的状态の墮落の徴候であり、社会的人格的無秩序の結果である。社会的無秩序とは社会意識の社会成員に対する支配の喪失、あるいは減弱に外ならず、従つて現代社会における高い自殺率はその著しい社会的無秩序の結果に外ならない」と言う。そしてこうした近代社会における社会的無秩序や無統制や過度の個人化等は、今まで述べてきたように、とりわけその資本主義という経済原理に基づくものであることをもここで重ねて注意しておこう。更に又そうした資本主義的利益社会が何所までも私利の追求や資本と労働との対立等を基礎とするものである限り、従つて労働大衆が不断に貧困や失業や搾取や不公正等におびやかされているものである限り、それは近代社会の、又人類世界の永遠の理念である苦の真実の民主主義の原理、自由と平等と友愛の原理をも遂には否定し去ることになるであらう。そうした近代社会の危機構造の上にみられる一つの危機的現象が正しく自殺に外ならないのである。否、寧ろ自殺はそうした近代社会の危機構造に対する個人のささやかな、ひそやかな、そしてひややかな告訴に外ならない。

哲学者ハルトマンは次のように言う。「人生の道は色々に交錯している。我々は無数の人々にめぐり合う。然し我々は果して幾人を真に倫理的な意味において見るであらうか。又逆に我々は如何に少数の人によつてしか見られないことであらう。我々は表面と表面で触れ合うだけで、何ら深く触れ合うことなく、孤独のうちにとり残される。すべての人に共通な人生の大いなる幻滅は憧る腕を持ちながら、空しく得るところなく、他人を目のあたり見て空しく生活し、顧みられず、評価されることもなくして見棄てられていることではあるまいか。誰も彼もが暖い眼差しを憧れていると知りながら、而も暖い眼差しを送ることなく通り過ぎ、ひそかに皆孤独を悩むということは実に矛盾の極みではないか。このように各人を阻むものは単に生活の多忙と不安のみであらうか。それは明らかに人間生活の凡ゆる利己主義であり、道徳的に見ることの無能力である」と。⁽²⁶⁾ハルトマンはそうした「空しく通り過

ぎること」Vorbeigehenを特に倫理的な利己主義や価値眼の貧困に帰するのであるが、然し我々はそうした倫理的な利己主義や価値眼の貧困の主たる原因を更に上に述べてきたような資本主義的市民社会における諸々の利益社会的な構造や関係に基づく無統制や無秩序や過度の個人化等に認めざるを得ないのである。

近代市民社会が、真実の民主主義を裏切るような、自由競争的無統制的な資本主義を原理とし、従つて人間相互の不信や闘争、物神崇拜や人間疎外等に明け暮れ、貧困、失業、搾取、階級闘争、戦争等々の危機状況を克服し得ない限りは、個人は、特に下層階級は、その公正に保障されない生存権の代償として、当然自由に己を処分する自殺権をもつのであり、少くとも社会はそうした個人の自殺権に対し口幅つたい文句は言えない筈である。そうした社会においては正しく「自殺は人間の特権である」(セネカ)と言えよう。人は言う、「原子爆弾を作つて、それによつて、自分たちの考え方に賛成しない人間の統治している国の住民を一举にミナゴロシにしてやろうと、そのチャンス wait している人に較べれば、自殺しようと思える人ははるかに善人であり、自分だけしか殺さない人は、他人を殺す人に較べたら立派な人間であります。その上、この世が本当に生きるに値すると証明した人はないのでから、生きるに値しないと考える人の意志を禁止する必要はありません。少くとも他人を殺す計画を公然と行つていて人々の意志を禁止できない限り、自分で死ぬという思想の自由すらない社会こそ生きるに値しないものであります」と。⁽²⁷⁾まさしく大方の偽らない気持であらう。勿論我々は自殺に賛成するのでもなければ、尙又自殺を讃美するのでもない。近代市民社会における自殺が如何に充分な社会的理由をもつにせよ、近代的自殺は殆んど凡て、シヨールペンハウエル⁽²⁸⁾の言うように、本当はおのが生命を愛し、生きることを欲しながら、にも拘らず死を選ぶのであるから、そうした自殺は、いろいろの同情すべき厄介な個人的事情によるものではあらうが、アリストテレスも述べているように、勇敢な人のなすことではなく、むしろ怯懦な人のなすことである、と言わねばならないであらう。我々は、全く立場は異なるが、シヨールペンハウエルと共に、自殺はこの世を真に解脱することではなく、最高の

道徳的目標への到達を逃避することである⁽³⁰⁾と言わねばならないだろう。自殺は矢張り個人の義務や社会的義務からの回避逃避であり、そうした自殺を生ぜしめる個人的問題や社会的問題の真実の解決克服ではないであろう。その限り、近代の自殺は殆んど凡て社会失格と同時に人間失格の結果と言わねばならないであろう。然しそうした近代の自殺にみられる人間失格の多くが矢張り特に近代市民社会の資本主義機構における諸々の社会失格に基因するものであることは改めて繰返すまでもないであろう。従つて、第一節で述べておいたように、そうした自殺を根本的に予防するには、資本主義機構に基因する打算的利益社会化や国内の階級的分裂や無統制と国際間の無秩序等を真に克服し、国内的にも又国際的にも適度の個人化と適度の統合化との新しい真実の民主的な綜合統一が目指されねばならないのである。そしてそうした課題こそが近代社会と現代社会を分つ管のものであり、現代は正しくそうした課題との対決を迫られている時代なのである。

我々は今まで前の第一節では先ずデュルケムの自殺論における若干の点を批判しながら我々の自殺論の立場を簡略に暗示し、次にこの第二節では前近代的自殺と近代社会との關係に一言し、続いて近代的自殺と近代社会との關係を検討し、そうすることによつて特に近代社会の構造や性格の若干を分析してみたのである。この小論をそうした問題に制限したため、我々のこの度の自殺論も、デュルケムの自殺論と共に、自殺の社会的原因を巨視的に探求することに傾き、その個人的諸条件を微視的に分析するまでに至らなかつたのは止むを得ない。曾つてテンニスは「共同社会から利益社会への発展における悲劇的葛藤は晩かれ早かれ必ず起る」と語つたのであるが、自殺は正しくそうした資本主義的利益社会化に基づく一つの顕著な悲劇に外ならない。カミュのように「本当に重大な哲学的問題は一つしかない。それは自殺である⁽³¹⁾」と語るのは誇張であるが、然し自殺はまことに近代の資本主義的市民社会における一つの重大な社会的病患の表現なのであり、その危機と混乱を証明するものに外ならないのである。最後に、少し唐突ではあるが、ここでマックス・ウェーバーの含蓄ある言葉を思いあわせて、一応この小論を終

えておきたいと思う。

『……この（近代的経済秩序の）大いなる発展の盡きるときには、全く新しい預言者たちがあらわれるのか、それともありし日の思想と理想との力づよい復活がおこるのか、それともその何れでもなくして、一種の病的自己陶酔をもつて粉飾された化石的機械化がおこるのか、それはまだ誰も知らない。もし最後の場合であるなら、こうした文化的発展の「最後の人々」については、次の言葉が当てはまるであろう。——「精神のない専門家、心情を失える享楽人、これら無にひとしきもの思いあがりて、人類の曾つて到達せることなき段階に遂に到達したりとなす」と。——』⁽³²⁾

- (1) Stimmel, Lebensanschauung, 2 Aufl., 1922, S. 75f.
- (2) Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, 4 und 5 Aufl., S. 181f.
- (3) 大内・向坂訳、共産党宣言、四二—四三頁
- (4) K. Jaspers, Die geistige Situation der Zeit
- (5) M. Weber, Gesamte Aufsätze zur Religionssoziologie, IBde, S. 4
- (6) Ibid., SS. 203—204, 梶山力訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」、二四三—二四五頁
- (7) Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, I Buch, §19
- (8) Ibid., 1 und 2 Aufl., Vorrede; Soziologische Studien u. Kritiken, I, S. 65f., 74
- (9) Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, 6 u. 7 Aufl., S. 3, 2 Aufl., Vorrede
- (10) 拙論「ルターとカントとマルクスにおける自由の問題」〔富山大学紀要、経済学科論集、創刊号（四節）参照〕
- (11) M. Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, S. 662, 浜島朗訳、権力と支配、二九〇—二九一頁、西島芳二訳、職業としての政治、四一—四二頁
- (12) Ibid., S. 655, 浜島朗訳、権力と支配、二七五—二八二頁
- (13) Park and Burgess, The City, 1925, P. 2
- (14) Anderson and Lindeman, Urban Sociology, 1930, P. 136, 208, 211
- (15) Ogburn and Nimkoff, A Handbook of Sociology, P. 352—3

- (16) H. Morelli, Suicide, 1899, Chapter IV, P. 117, 163
- (17) Sorokin and Zimmerman, Principles of Rural-Urban Sociology, 1929, Chapter VII, P. 171
- (18) H. Morselli, Suicide, 1899, P. 130—134
- (19) ibid., P. 141
- (20) Ogburn and Nimkoff, A Handbook of Sociology, P. 352
- (21) 清水盛光著「家族」一五〇—一五二、二三四—二三五、七六—七七、一四—一頁等
- (22) Sorokin and Zimmermann, Principles of Rural-Urban Sociology, 1929, P. 35
- (23) Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, II Buch, § 39
- (24) J. Macmurray, The Modern Spirit; 堀秀彦訳「近代精神の形成」六頁
- (25) R. S. Cavan, Suicide, 1928, Chapter xv, P. 328
- (26) Nicolai Hartmann, Ethik, 1935, S. 12, Vom Vorbeigehen
- (27) 伊藤整著「女性に関する十二章」一七六頁
- (28) 石井立訳「ショーンハウエル」自殺について「創元文庫」五六—五八頁
- (29) 高田三郎訳「アリストテレス」ニコマコス倫理学「一三八頁
- (30) 石井立訳「ショーンハウエル」自殺について「創元文庫」一七三頁
- (31) Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, II Buch, § 38
- (32) 矢内原伊作訳「カント」シンネの神話「一〇頁
- (33) M. Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. I, S. 203f., 梶山力訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」二四五頁